

言葉の悩みだけが
コミュニケーションの悩み、
ではありません



お互いの常識の違いについて、行き違いがおこる

- ◆ 今の園と出身地の施設の違いについて、子どもがなかなか馴染んでくれない。
 - ◆ 保護者が時間にルーズで、お迎えの時間に遅れる時も連絡が必要という意識が薄い。
 - ◆ 生活の中で、園の行事(運動会や誕生会など)を優先するという意識が薄い。
- こんなふうに対応してます
- ◆ 「こちらに合わせてもらう」というより「出身地ではどうだったかを教えてもらう」と考え、その上で安全面など必要なことは粘り強く伝える。
 - ◆ 日々声掛けする。「心配しているよ。みんなで見守っているよ」と伝えることで、時間に遅れるときにもだんだん連絡してくれるようになった。
 - ◆ 保護者も少しずつ慣れてきて、日本語も上達し、話やすくなってわかってもらえることが多くなってくる。時間はかかるものと思っておくと、気持ちも楽になる。

出身地の社会文化・宗教に合わせた対応を希望される

- ◆ 出身地では乳幼児に食べさせないものの除去、あるいは宗教上禁忌の食材やその成分が含まれる食品を使わないでほしいと頼まれる。
 - ◆ 宗教上避けるべきとされている行為をやめられないか頼まれる。「プールの着替えを別室でできないか?」等。
- こんなふうに対応してます
- ◆ 食べ物については、基本的にアレルギー対応と同じようにしている。園でも宗教について勉強し、マニュアルを作った。
 - ◆ 丁寧に希望を聞いた上で、園でどうしても対応ができないことについては説明をして、理解をしてもらうこともある。
 - ◆ 出身地や宗教が同じでも、保護者の許容範囲にはそれぞれ濃淡がある。最初に、丁寧に聞き取りをこころがけている。

このリーフレットは、以下の方たちへのヒアリングをもとに作成しました。ご協力くださったみなさま、ありがとうございました。

- 保育・幼児教育施設 9か所
 - 子育て支援施設 2か所
 - その他 4か所
- 那須ダグバ潤子さん(京都橘大学看護学部 准教授)
エニ・レスタリさん(アンニサ・シャリハー アドバイザー)
波多野充希さん(合同会社Shutchchoiku) 他

参考

那須ダグバ潤子・松本佳大・市川徳子
「言語文化的に多様な背景をもつ子どもたちが安心して成長できる社会を目指して一保育園での情報バリアフリーへ向けた3つの提案」



厚生労働省 子ども・子育て支援推進調査研究事業
「保育所等における外国籍等の子ども・保護者への対応に関する調査研究事業 報告書」



「やさしい日本語」を広める会
「外国人にわかりやすい やさしい日本語
一保育・幼児教育施設編一」



「やさしい日本語」を広める会は、日本社会に向けて「やさしい日本語」の意義とコツを伝え、言語文化が異なる人々と積極的にコミュニケーションをとってもらうことで、だれもが生きやすい世の中になることを目指しています。

「やさしい日本語」を広める会



Mail: hiromeru.yasanichi@gmail.com
Web: <https://tsukuru-kyoto.net/bank/387-2/>
2022年12月作成
令和4年度 上京区民まちづくり活動支援対象事業

多様な言語・文化の背景をもつ家族との
よりよいコミュニケーションのための

2022年度版

保育・幼児教育施設への ヒアリング報告書

保育・幼児教育現場の皆さんが外国につながる子どもや保護者と接しやすくなることを願って作りました。当会作成の「外国人にわかりやすい やさしい日本語 一保育・幼児教育施設編一」と共にご活用ください。



外国につながる子どもや保護者という呼び方について

日本国籍であっても、外国で生まれ育った場合には日本語や日本の文化がよく理解できないこともあります。国籍に関わらず、多様な背景を持った人たちをすべて含めて表現しようとしたとき、どんな呼び方がふさわしいのかわたしたちにも迷いがありますが、このリーフレットでは「外国につながる子どもや保護者」の呼び方を使っています。



2022年12月の時点で、京都市の外国籍住民は、数・割合ともにコロナ禍前を上回り、市民の30人に1人以上となっています。これを追うように、現在、乳幼児人口も増えつつあります。また、出身地も多様化しています。保育・幼児教育現場にとって、今後外国につながるお子さんを受け入れて、円滑な義務教育就学につなげ、子どもの健全な育ちを保障することは、喫緊の課題と言えます。

施設のみなさんは、こんな実感をお持ちでした

- ◆ 子ども同士は本当に偏見がない。日本語と外国語とで、言葉は通じていないはずなのに、うんうんと一生懸命話していたり、いろんな言語でフルーツバスケットしたり、お互いがお互いの文化や言葉を自然に感じている。
- ◆ 外国につながる保護者は、きっといろんな場面で日本社会に気を遣いながら生活しておられると思う。ほんとうは、せめて子育ての場だけでも、「気を遣わんでいいよ」と言ってあげたい。

「やさしい日本語」を使ってください

子どもや保護者との信頼関係を築くには、日頃のコミュニケーションを積み重ねるしかありません。英語や他の言語が上手に話せなくてもいいのです。「やさしい日本語」を使ってください。

コツは▼はっきり、さいごまで言う ▼短く話す ▼ゆっくりと話す ▼敬語を使わない 等です。「やさしい日本語」に正解はありません。大切なのは、相手とわかり合いたいという気持ちで接すること。伝えること。言葉だけでなくイラストや実物、ジェスチャーも使ってください。翻訳アプリも「やさしい日本語」の入力が役立ちます。

※ 健康状態の確認など、正確な情報を共有するときには、「やさしい日本語」だけではなく、相手がわかる言語での対応も必要です。

カギは
外国につながる家庭と施設を
繋ぐ人



助けてくれるキーパーソンがいる

通訳を引き受けてくれる人は、保護者と出身が同じで日本社会に馴染んでいるお友だち、その言語がわかる園の職員や他の保護者、なかには大人になった卒園生まで、場合によってさまざまでした。そしてこの人たちが、文化や制度の違いについても保護者の思いと日本の施設の事情の双方を理解して、お互いの橋渡しをしてくれています。

- ◆ 保護者に親身になって手伝ってくれる人が、園の味方にもなってくると本当に助かる。
- ◆ 保護者の了解を得て、その友だちに相談をさせてもらうことで、難しい状況が良くなっていったことがある。

一方で、以下のような課題も……

- ◆ 手助けしてくれる人は、保護者や施設の自助努力によりどこから見つけてくるしかない。
- ◆ 特定の人に負担がかかり、その人の善意に頼る状況である。
- ◆ あくまでも個人の善意によるものであるため、いつでも対応をお願いできるわけではない。また、内容の正確さにおいて「情報保障をしている」とは言えない状況である。本来は、個人情報の取り扱いとしても問題がある。

一方、子どもの健全な育ちのために寄り添い、施設の実情を理解してくれるサポーターや専門家の存在も重要です。

- ◆ 一見、発達に問題があるように見えたときに、日本語がわからないだけなのか、発達がゆっくりなのかの見極めが難しい。一緒にその子に寄り添ってくれるサポーターがほしい。

厚生労働省の調査研究事業では、市区町村によっては、必要に応じて通訳を派遣したり、サポートルームを設置し通訳者と保育教諭を常駐させたり、臨床心理士に子どもの様子を見てもらったりする制度等が紹介されています。いずれにせよ、各施設だけの努力には限界があると言えます。

おたよりや連絡などの
コミュニケーションのコツ



それぞれの施設の状況に合わせた工夫がある

- ◆ おたよりにできるだけイラストを取り入れる。遠足のリュックに入れるもの、お弁当の中身の例など。
- ◆ おたより類は、年間スケジュールは全部ひらがなで書く。特に必要なのは「やさしい日本語」で。他のものは文は易しくできなくても、ふりがなをつけるなどの対応をしている。
- ◆ 紙のおたよりを渡しつつ、お迎えの時などに口頭でフォロー。
- ◆ 緊急時にはメールを使用。日本語と、AI翻訳したテキストを一緒に送る。元の日本語の文章を簡潔に書くことで誤訳を減らすことができる。
- ◆ 保護者によっては、スマホを文字にかざしてAI翻訳で読み取ってくれる。この場合は、ふりがなが翻訳の邪魔になると聞いたので、あえてつけないようにしている。
- ◆ AI翻訳に対応することを想定して、手書きはなるべく避けてデジタル化を進め、メールやアプリを活用している。
- ◆ 保護者会の文書類はメーリングリストを使い、AI翻訳の使用を事前に説明の上、内容にかかわらず全て英訳をつけて送信する。英語ができる保護者が多いので有効である。中身を精査する手間を省き、継続性を優先している。

けが、病気など緊急時の不安は各園が持ちました。

- ◆ これまで大きな怪我などはないが、かすり傷でもお迎えのときに保護者に心配をされることがあり、説明が難しい。もしものことがあったらという不安はある。

外国につながるお子さんを継続的に受け入れ、経験を重ねている施設に共通しているのは、園のすべての子どもの健全な育ちを考え、権利を尊重しておられること。外国につながる子どもの対応にも、おのずと工夫を重ねて試行錯誤されていました。

また、子ども、保護者双方との信頼関係を重視して、丁寧なコミュニケーションを大切にされているのが印象的でした。